
雨が上がる～死に神と少女～

佐和島ゆら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨が上がる〜死に神と少女〜

【Nコード】

N8896M

【作者名】

佐和島ゆら

【あらすじ】

人格を殺す役割をもった人格「死に神」は自分の役割がよく分かっていなかった。一人、人格の死体に文句をつけていると、また新たな人格殺しの命令を告げる鐘が鳴る。そこで死に神はまりあという少女（人格）に出会う。

「それがあたしの役割。真央を生かすために、生まれたあたしのね。だから怖くないよ。死に神さん」

奈々という幼い少女を小刀で貫く直前、少女はそう言った。何人もの人格を殺してきて、ひとつ不思議なことがある。

どうしてみんな、消されるのにあんなに穏やかなのだろう。

こうこうと柔らかな光を放つ百合の花を明かりにして私は裾の擦り切れた黒の服を繕っていた。

私の部屋にはガラスの棺が時折ふわふわと漂う以外は地味な作りをしている。簡素なベツトに引き出しのある机。全然使われない大鎌とよく使う小刀だけだ。その気になれば、私のほしいものは何でも手にはいる身だけだ。

「ん？」

百合の花の灯りが揺らめきナイトライト程度の灯りしかつかななかった。しおしおと分かりやすく百合の花は頭が垂らしている。

「もしかして水切れ？」

こくこくと頷く百合の花。

本当に神の御使いなんだよねと思いつつ、呪文を呟くといつのまにか水のたっぷり入ったじょうろの取っ手をつかんでいた。

「……」

どぼどぼとやや乱暴に根本に水をそそぐと、百合の花はまたこうこうと輝きだした。

「あなたぐらいだよ。要求するの」

私はこの場所の神様で王様だから、何でも手にはいるけど、たとえば生き物を生み出しても、この百合みたいに何かを要求することは私が望まなければないだろう。こいつは神様から与えられた私を守る意思を持つアイテムで、私よりも強い力を持っている。

何かをこの世界で創造しても、みんな私から生まれるから、いい子で、私のエゴに頷いて、本当、つまらない。

だから私の世界はいつも暗くて質素で、仕事の関係上棺が漂っている。

私の住む世界はその特性上、誰も来ることはない。ここは私の場所で、私が王様の世界。何でもやれるけど、ここからは仕事以外では真央が死ぬまで出られない。

それが人格を狩る人格である私の役割だった。

一つのガラスの棺が語りだした。

「あのね、真央はね。小学四年生の時に行った学校のスキー教室で、サンドイッチがお弁当でうれしかったの。いつも白いご飯とおかずだから、いつも違って、楽しかったの。デザートバナナも甘くてすごくうれしかったの。真央は、私はお母さんが大好きなの」
別の棺も語りだした。

「だけど真央はスキーが苦手なの。怖くてしょうがないの、高いところから降りるのが。みんなにバカにされて、悔しかったの。でも何て言えばいいのか分からなかった。ううんそれだけじゃない……真央は私は知ってたよ。真央はいじめられっこだから、何かできたとしても、とにかくおかしいから、何もできない子であるのが、きつと一番なんだ。だって、みんな、誰かの上が心地良いでしょう？」

お人形さんの真央が、みんなの都合にあっていたでしょう？」
また別の棺の中身が泣き出した。

「痛いよ、痛い。どうして助けてくれないの。助けてほしかったよ。どうして、お母さんとお父さん、真央の言うことはわがままだから？　じゃあいい子になるから、私の話を聞いて。助けて……助けて」

「うるさいなあ……もお」

思わず棺をじろりと睨んでしまった。

棺はその瞬間、言葉を飲み込み黙り込んだ。

棺はきれいな花に敷き詰められていて、その上に人格の死体が眠っている。そして自分が生きていた頃の真央について自分の人格視点が語り出す。

これがまた非常にややこしい。同じ事や同じ時期について話しをしていたりするのだが、まったく内容が一致した話が出てこない。同じ事でも一つの棺は憤りながら、また別の棺は享樂的に　人格ですら宿した真央について一貫性のある話は出来なかった。どの人格も正確に真央について語れないのだ。だけど人格たちはもつともらしく真央について語る。

「……馬鹿みたい」

嫉妬混じりに呟いた。

私は真央に一生認識されない人格だから。

てんではらばらに真央について語る人格の言葉は全部が正しくて、全部が偏っている。

その話を聞く私は、けして真央の人格として真央に宿ることはない。真央の意識していない無意識の中で、神様が作った人格殺しの人格として生き続ける。

それは自分の意義がよく分からなくなりそうなくらい果てのない仕事だった。

心が必要としなくなった、新しい人格を作るための容量を確保しなきゃいけないとなった、人はどんどん変わるから、人格の死体はどんどんと積みあがっていく。

人は強くないから、変わらなきゃ耐えられないから、世界で生きつつて本当孤独だから。

集団の中の孤独は辛いんだよと、ある棺は語った。だけどどんな事をして、自分の人格ですら、その本体が何なのか、語りきれないのだ。

何だそれとは思っけど、私は私を宿した真央の顔も知らない。

死んだ人格が感情のない空っぽの声で語る話を聞き続けていただけで 知ったかぶりを披露する相手もいなくて 本当馬鹿みたいと呟いてしまった。

私はいつまで何のために、狩り続けなければいけないのだろう。

大きくため息をつくと上から重い鐘の音が鳴り響いた。

タイミングが良すぎるというか何というか、また人格を狩りに行かないといけない。

仕事の時間だと思いながら私は黒い外套を羽織り腰に小刀を装備した。

目の前には重々しい両開きの扉が姿を現し、私は腕に力を込めて扉を開いた。

飴玉が降っている。

カラフルな紙に包まれた飴玉が降り続けている。扉から出る前に黒い傘を出して、ごとごと大仰な音をたてる飴玉をしのぐとしたら勝手に飴玉が私を避けた。

「傘、いらさないじゃない」

どうも相手の人格は私が来たことに察しているみたいだった。人格は各自で世界を持っていて、その世界の王様として暮らしている。それにしても何だかずいぶんとのんびりした世界に来たものだ。鹿やらウサギが私を木の陰や草むらから覗いていて、足音をたててもまったく恐れる事がない。むしろ人懐っこさを覚える視線だ。

「……野生、よね？」

思わず私は周りを見回した。

見ているだけでもすごく幼い世界観が伝わってくる。

木には様々な色の果実が実っているし、何故か骨付き肉までぶら下がっている木まである。狐がすりすり私の足にすりよってきた。

飴玉は降っているけど空はきれいな薄青で雲一つもない。気温もち

ようどよいくらいで過ごしやすい。

とりあえず今自分が何処にいるのか分からないので魔法を使った。呪文を呟くのと同時に、小さく世界の形が目の前に浮かび上がる。

どうもこの世界は島の形をしていて周りには海しかないー孤立した島（世界）だった。

自分のいる所は島の西の森の中で、島の真ん中に大きな広場があった。とりあえずそこを目指すことにした。

しばらく歩き続けて気がついた。

動物の姿は見かけるが人の姿は全く見えない。そもそも人気すらない。

しかし暮らす分には全く不便ではないようだ。ギャグにしか見えな
い木が大真面目にあるし。

やがて広場につくと、真ん中にヘンゼルとグレーテルに出てきそう
なお菓子の家があった。早速入ってクッキーのイスに座ってチョコ
のテーブルに手をついていると、ドアについた鐘の音を鳴らしなが
ら少女が入ってきた。

「こんにちわ」

「こんにちわ。だいぶ寝てたのね」

「うん。真央が忘れかけてるからね、久しぶりに出てきたの。あ、
自己紹介するね、私はまりあ」

歓迎の意を込めてか、まりあは白い腕を広げて私に抱きついてきた。
柔らかいまりあの二の腕が肩にあたる。

「えへへ、やつぱり美人さんだね」

頬を撫でてくるまりあに私は首を傾げた。

「やつぱりって……私の顔を知っているの？」

「うん。奈々の時にね、実は見かけてたの」

「あなたが出てくる前の子だったかな」

「うん。天真爛漫だったけど、長く生きれなかったね。嫌だね本当」
まりあは口をとがらせながら窓の外を見た。カラフルな飴が降り続

けている。

本当かわいらしい容姿をしていると思った。赤いリボンに柔らかそうな金の髪、フリルがたくさんついたエプロンドレスに青いワンピースからほっそりとし白い腕と足が出ている。

「ねえ、まりあ」

「うん？」

「とりあえずね。この飴、雨にしてくれない？ 結構騒々しい音をたてるのね、これ」

「はやいなあ、もうなの？」

逆に落ち着かないのだけど、この状況。

私はさらに追加注文をした。

「後、このお菓子の家。いつ溶けだして私の服を汚さないかって心配になるし。とりあえず普通の部屋にして」

「ええ、やだなあ」

そう口ではやきながらも、ぱんぱんとまりあは手をたたく。すると何もない白い壁の部屋になった。私の着ている黒の長い服が映える白だった。

白い部屋で可愛らしいまりあはくるりと一回転する。

「もう、真央は私を忘れたのかな？」

「さあ。ただ、新しい私を見つけたみたいで……それをいれる心の容量を探しているみたいですけど」

「そっか、そうだよな。だからあんたが私を殺すんだね」

まりあは笑い私も曖昧に笑った。

「それが死に神っていう……無意識の人格の役割だね」

そう呟くとまりあは自己紹介の続きと言って私に自分の役割を話し出した。

まりあは私の今いる木檜真央の中学生の頃の心の中心にいた少女だそう。両親の離婚問題や学校の友達関係に悩んでいた真央は心の中に一つの楽園を作っていた。人が一人もない動物だらけの暖か

い絶海の孤島、まりあは魔法がつかえて、島の動物たちから信頼を寄せられていた、そういう設定だったそうだ。

「私を殺すきっかけの子ってどんなの？」

「真央は就職したんで、必死に今仕事をするための人格が出来かけているそうです」

いつのまにか頭に入り込んだ情報をわたしはまりあに伝えた。

「そうなんだ……幻滅しちゃうくらい現実的。なんか私がいるくらい浮き世離れしていると思っただのに」

そう言いながらまりあは腕を伸ばすと、白い指先にいつのまにか黄金の蝶が黄金のりんぷんをまき散らした。

「ねえ、死に神さん」

「何ですか？」

「私の輝く条件って知ってる？」

私は首を傾げて、それからゆるりと横に振るとまりあは言った。

「私は真央の苦痛を栄養にしていたの。真央が現実で苦痛であればあるほどに、私は心の中で真央のための楽園をつくって、その楽園で生活するまりあというアバターになった」

くるりとまりあは回る。

黄金の蝶は、腐臭をはなつ蛾になった。

きれいなまりあの姿はもうない。

白い部屋は消え去り鼻が曲がりそうなおいを放つ酸の雨の下、まりあは百本は越える錆びた槍や剣に貫かれ、酸の雨で体の皮膚は溶けていた。

「これが……あなたなの？ まりあ」

破け、赤黒い肌を露出させた顎をまりあは動かした。

「だとしたら幻滅？ やっぱ女の子は可愛い方が素敵？」

「さあね、正直人格の死体管理人もしているから、あまり美醜に興味はないのよ」

からからとまりあは笑った。

「ひどい理由」

私は腰元の小刀を鞘から外した。

「ただ、こんなに剣やら槍が刺さっていると何処を刺せばいいのか悩むのよ。何処を刺しても貴方を棺へ送り込めるけどね」

「ふうん、死に神は死に神なりの悩みがあるのね、ふふ、おかしいなあ」

やっぱり穏やかだなあと思いつつ私は指す場所をねらい定めた。やっぱり胸を刺すのがいいだろうと剣と槍を魔法で払うと小刀を降り上げた。

足下がおぼつかなくなり膝をつくとき激しい地面の揺れに耐えた。

突然地面が隆起する程に揺れて、私は目を丸くして困惑するしかなかった。

「何これ……」

呟くとくぐもった悲鳴が聞こえた。まりあが隆起した土の槍に身体を持ち上げられている。

「まりあ！　　どういう事なのこれは！」

大声で尋ねたが、苦痛によって世界を構築する少女は目をむくばかりでなにも答えない。それどころか嫌な音を立てて土の槍が抜けてそのまま地面に落ち、酸の雨で柔らかくなった土に沈んでいった。地面の激しい揺れは止まずどんどん強くなり私の立つ場所に亀裂が走り崩壊した。底のなさそうな闇に身を投げ出された瞬間叫んだ。

「私をとにかく守れ——神の御使い！」

魔法陣の激しい光が私を包むと暗く淀んだ闇に私の身体を飲み込むほどの白百合が花開いて、そこに私は身を落とした。私を包んだ百合は花開いた状態から蕾となり、百合の花に守られた私は強い花の香りに頭がくらみ意識を失った。

目を開けると、いつのまにか森の中にいた。まりあの世界の森に。様々な果物の木や骨付き肉がぶら下がった木に動物が何匹か私を木の陰から覗いている、幼さ全開の想像だらけの森だ。ただはじめに

来た時と違い雨が降っていた。容姿を崩したまりあがいた場所と同じ酸の雨が鼻を曲げる臭いを放ちながらふっていた。頭を垂らす百合の花を雨よけにしながら立つ私の目の前に、きれいな姿のまりあが現れた。酸の雨に濡れるのにも関わらず、目を丸くし大慌てで周りを見渡している。酸の雨に濡れてもまりあの姿に異常はない……身を守る魔法の気配がした。

私は声をかけた。

「まりあ、これはいったいどういうことなの？ あの状況から世界の再構築でもしたの？」

大きくまりあは首を横に振った。

「違う、と思う。というかよく分からない。いきなり栄養がきて、世界が構築された、この絶海の楽園が。だけどこの状況はよく分からない……ううん、ありえないよ。私は死ぬはずだったのに、何でこうなっているの……」

『憎い……憎い、自分が、自分の弱さが一番憎い……』
抑揚のない声がした。

私が声をした方を向くと、同時に振り返ったまりあが声を上げた。

「ば、化け物！」

確かにタールのような粘つく黒く大きな固まりは化け物にしか見えなかった。黒の隙間から重い感情が籠った赤黒い目が覗いている。まりあは化け物を凝視した。

「何でここにいるの？」

「知っているの？ こいつのこと」

まりあは小さく頷き震える声で言った。

「あいつは、ここで用意した化け物という役、システム。真央の大人に対する嫌悪感が生み出したもの。だけど真央は大人になったのに、何で出てくるの」

化け物はまりあを見た。赤黒い目に憎悪と歓喜が浮かぶ。気持ち悪

い音をたてながら体から出した長い爪を振りかざしてまりあに向かつて駆け出す。

「止めなさい！」

とつさにまりあに立つと長く鋭い爪が肩を貫いた。肉に爪が食い込む感触と激しい痛み、背筋に強い痺れが走った。同時に頭に強烈なイメージが現れる。

青い制服をきた女性が同期の子に罵られて、でも問題を起こしたらいけないと笑顔でいる姿が見えたーその女性は中学の時にも真央をいじめていた子だった。

「何、これ」

思わず痛みを忘れて呟くと化け物が言った。

低い聞き取りづらい声で。

『自分の弱さが憎い、自分が大嫌い……何も言えない、何も変わってない、過去なんて消しさりたい』。

化け物は赤黒い目から紫の涙を流して叫んだ。私は化け物の爪を肩から引き抜くと身体がよろけてそのまま尻餅をついた。

まりあは悲しそうな目で化け物を見て、長く鋭い爪を強く掴んだ。

白い肌から紅い血が垂れて、あつというまに掌が紅に染まった。

まりあは一瞬目を見開いたがすぐにまた悲しそうな目になり淡々と言った。

「そう……あなたは真央なのね。大きくなったね」

そしてこう言った。

「私を殺したい？」

化け物は泣きながら大きく頷いた。

「そうだね。真央が昔から嫌な物に対して何もいえないのは、ここで何度も化け物を殺したから。真央の願いはずっとここで叶っていたから。……だけど本当はそんなの良くなかったんだ。真央の間違いないんだよね、ここは」

まりあはにこつと笑った。

「いいよ、これが真央の幸せになる方法なんだよね」

まりあの足下から黒いタールの泉がわいて彼女の全身をつつんだ。赤黒い目で仕事着を着た大人の女性を優しく見つめ、長い爪で彼女を包んだ。女性は、いや大人の真央は包丁を化け物になったまりあに突き立てて叫んだ。

「あんたなんて、大嫌いつ！」

世界が暗転する。真つ暗になったまりあの世界で、白い影の形になった真央の姿は粉々に碎けて消えた。

真つ暗になり上か下かも分からなくなったが、いつのまにか私は百合の花に飾られた階段を下っていった。

もう何だか訳が分からなくなってきた。

あんな事をして……いったい真央は幸せになれるのだろうか。

「さあ、分からないよ。きつとそれは神様しか分からない」

酸の雨に濡れて、百本以上の剣と槍に貫かれて、崩れかけた体になったまりあは言った。

まりあは生きていた、いや真央が殺せるわけがないのだ。人格殺しは死に神の私にしかできない。逆に忘却によって無意識の世界までに落としかけた人格の世界を呼び起こすのは殺すどころか痛みとして復活させてしまう。

だけどそれでも自分の手で殺したかったのかだろう。呆然としながら私には真央の人格殺しを見つめるしかなかった。

そして呆然としながらも思い浮かんだ質問に真央は分からないと答えた。

「だけど、真央は苦しかったんだよ。きつとこれから何度でも私を殺しにくるんだろうね。その痛みが続く限りは」

けれどそんな事をしても、所詮ここは真央の心の世界……現実が変わるわけがない。いつか真央の内面をぼろぼろになるまで傷つける未来が容易に想像できた。

私は重く息をついて自分の額に手をあてた。

「わっかんないよ。真央も貴方たちも、訳が分からない。何でもう

こう不毛なことを」

「それが私たちだからとしか言いようがないな。私たち（人格）は私たちからなる真央を守り続けるのが、役割だから。私が消えてもほかの私が真央の存在させ続ける。それが本当大事な役割だから。だから本当は自分なんてどうでもよくて、どうでもよくなくて……真央を存在させるための欠片にすぎないんだ私は。死に神のあなたとは違うの、存在する意味が」

投げやりな口調で私は言った。

「まあほかの人格に殺しの役割は持てないしね」

まりあは首をゆっくりと横に振った。

「ううん。それだけじゃない、貴方は神様の管轄下にあるから、真央を構成するものじゃないから、迷ったり出来る。私はそれが出来ない、考えられない。殺して楽になるなら殺してって思ってしまうねえ……死に神さん聞いて良い？」

「何が？」

「どうして泣いてるの」

口の中にしょっぱい味が広がるのを感じた。私は自分の頬に流れる涙に手をあて、それから強く目を拭って言った。

「むかついているからよ。不毛すぎて、訳が分からなくて、真央もあなたもどっちも」

そこで強く唇をかんだ。きっとこの先の言葉は言ってもまりあには分らない。真央には私の言葉は伝わらない。私に出来る事は真央にまりあを殺させないようにする事。それが私の役割……！

呪文を唱えてこの場所の天気を変えつつ、私は自分の腰元に手をやった。

魔法により酸の雨を降らす曇天は消えて真っ青な空が広がると、まりあはかすれた声を上げた。

「わあ、綺麗」

「天国ってこんな空な気がするの。じゃあ、まりあ」

私は小刀を降りおろした。

「さようなら。私の世界で待っているね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8896m/>

雨が上がる～死に神と少女～

2010年10月10日22時44分発行